論文題目

脱植民地主義の民族音楽創造

——解放、分断・冷戦期における在日朝鮮人の音楽活動史

姓名

金理花

1．論文の概要

本論文は、在日朝鮮人によっておこなわれた「解放」後の民族音楽活動について、その創成・享受・拡散・継承の過程を検討することを通じて、在日朝鮮人の民族音楽活動が抱えた3つの困難——日本社会の抑圧的・排除的な社会構造／朝鮮半島の南北分断という政治的環境／在日民族音楽を創造するという文化的課題、といった「ポストコロニアルな状況」を克服していく過程を、各事例に内在しながら歴史的に明らかにしたものである。

本論文が対象としたのは、朝鮮が植民地支配からの解放を迎えた1945年から1980年代までの時期であり、解放から分断・冷戦期へと変遷していく時間軸において、東アジアにおける情勢の変化が在日朝鮮人の民族音楽活動の在り方に与えた影響について考察をおこなった。

2．「解放」後在日朝鮮人による民族音楽活動とはどのような活動か

「解放」後在日朝鮮人による民族音楽活動とは、植民地「解放」以後も日本に継続して在留することを余儀なくされた朝鮮人が、日本社会に暮らす民族的マイノリティとして生活するようになるなかで形成された活動である。植民地期に、多くの朝鮮人が口ずさんできた民族音楽は、例えば≪타향살이（他郷暮らし）≫や≪목포의 눈물（木浦の涙）≫といった、植民地期の朝鮮歌謡などがある。それらは日本風の音構成が混じった旋律にのせて、植民地期の悲哀の心情をうたう歌謡がほとんどで、また、朝鮮音楽固有のリズムである「長短（チ

ャンダン)」とは根本的に異なるリズムを持つ音楽であった。このように、植民地期の文化政策の下で民族的な文化経験そのものを奪われてきた人々が、植民地「解放」以後になって、日本の文化支配の下でつくられたそうした音楽を殊更に拒否して、新しい民族音楽による営みを創り出そうと志向するようになったのだ。こうして誕生したのが在日朝鮮人の民族音楽活動である。

この活動は、旧宗主国に留まることを余儀なくされた人々が、植民地支配下で破壊された民族の文化を一から再建していくという形となっていて、世界的にもおそらく類例のない特殊なマイノリティ文化創造の様相をみせた。一般的にマイノリティ文化というものは、様々な事情から本国を離れた人々が、ホームランドの文化経験を持ち寄りながらそれを移住先で再現するか、または居住地の文化と組み合わせて独自に発展させながら継承していくという形をとると認められる。これに対して、在日朝鮮人の場合は、原体験となるはずのホームランドでの文化経験自体が植民地支配によって変容を迫られたり、または破壊されていて、この人々が自民族の独自な文化活動を営むには、まずは当の民族文化そのものを創り出すことから出発しなければならなかったのである。

しかも、本来そうした民族文化創造の源となる朝鮮本国が、南朝鮮地域に進駐した米軍政によって統一国家の樹立を阻害され、米ソ分割占領上の都合で設定された北緯38度線を境に南北分断・朝鮮戦争へと至る対立状態に入ると、朝鮮民族の音楽文化の在りようそのものが、民族分断の政治的な影響を色濃く受ける形となってしまう。このことが、在日朝鮮人の民族音楽活動の創造をさらに困難にしたのは間違いない。

このように、在日朝鮮人による「解放」後の民族音楽活動とは、第一に、旧宗主国内において不安定な在留条件におかれ、かつ文化的にも旧宗主国の圧倒的な影響を受け続けるという状況下にあって、第二に、その営み自身が朝鮮半島の南北分断・冷戦の構図に強く規定されてしまうというなかで、第三に、在日朝鮮人内部で民族音楽の営みを改めて創り出す実践としてはじめざるを得ないという、その全体が植民地支配の歴史に規定されていて、それゆえまさに「ポストコロニアル」というべき三重の困難を抱えた活動となったのである。

3. 論文の構成

本論文は、以上に述べたような「民族音楽活動が抱えた3つの困難」という問題意識に基づき、民族音楽活動のなかでも主に芸術活動、生活の場における音楽活動、朝鮮学校における音楽教育の事例に焦点を当てて考察をおこなった。論文の構成は以下である。

まず第1章では、民族音楽活動の、創成の過程として、「解放」後に新たにはじまる在日朝鮮人の民族音楽活動について、民族団体の文化活動とのかかわりから明らかにした。「解放」後在日朝鮮人の民族音楽活動の出発点となる1945年から、やがて民族芸術を専門に活動する中央芸術団が結成される1955年以前までの時期を取り上げ、在日朝鮮人の民族音楽活動を規定する3つの困難が編成されていく歴史過程を明らかにしている。

続く第2章では、享受の過程として、民族芸術活動の展開に着目し、在日朝鮮人の音楽活

動に朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）の社会主義民族芸術が受け入れられていく過程を明らかにした。とりわけ、在日朝鮮人の民族音楽活動が抱えた 3 つの困難のなかでも「民族音楽の再創造」という局面が、中央芸術団の活動形成に大きく作用した点を検証している。

こうして、共和国の社会主義民族芸術が在日朝鮮人芸術人に伝わっていったことで、それらが次第に、様々な民族音楽活動のなかに拡散していくことになった。この拡散の過程を、第 3 章、第 4 章、第 5 章においてそれぞれ明らかにしている。第 3 章では、生活の場における民族音楽活動に着目し、65 年体制の形成によってそれまでの東アジア冷戦構造が大きく転換していく状況下で、3 つの困難のなかでも「南北分断・対立」の局面がとりわけ強化され、音楽活動の在り方に変化が及んだ点を検証している。第 4 章では、朝鮮学校における音楽教育の形成過程について、教育を通じた「民族音楽の再創造」という局面が作用した活動であったことを明らかにした。第 5 章では、中央芸術団による芸術活動や生活の場における音楽活動、そして朝鮮学校の音楽教育と、様々な形で展開してきた民族音楽活動が総結集していく動きとして、1966 年から 1970 年にかけて上演された大音楽舞踊叙事詩の上演実践について考察をおこなった。65 年体制の出現以後、朝鮮半島の分断・冷戦対立激化の影響が在日朝鮮人社会にも及んだことで、「南北分断・対立」の局面が特に強化された一方で、大規模公演の上演によって民族音楽活動における音楽様式の確立や担い手の育成という「民族音楽の再創造」の局面が活動の在り方に作用した点をそれぞれ検証した。

ただ、このような冷戦対立の影響を強く受けた民族音楽活動は、音楽活動の内実までもが冷戦状況に強く規定されるという功罪がみられたのもまた事実であった。これに対して、第 6 章では、1970 年代後半以降、それまでの冷戦に規定された音楽文化とは異なる、生活実感に根差した在日民族音楽の再創造をめぐる動きがあらわれたことに着目している。再創造された新たな民族音楽を受けとめていく継承の過程として、再び朝鮮学校における教育実践について考察をおこなった。

本論文では、以上で述べた「解放」後の在日朝鮮人による民族音楽活動の形成と展開を、旧宗主国日本において、音楽を通じて新たな民族文化を立ち上げていく、ポストコロニアル状況の「創造的克服」の過程として新たに位置づけた。各章においておこなった、音楽実践の在り方に着目した考察を通じて、ポストコロニアルな状況下にある在日朝鮮人の民族音楽活動の展開には、創造をめぐる実践が不可欠になるということを究明したのである。そして、このような民族音楽の特徴は、実は決して在日朝鮮人の場合にせまくかぎられたことではなく、さまざまな場のポストコロニアル状況における音楽の特徴を表すものとも考えられる。この視点は世界の音楽におけるポストコロニアルの問題について更に広く深く研究をすすめる重要な手がかりを与えるものであり、このような視点を提示し得たことは本論文の成果であり意義である。